

第106回薬剤師国家試験に向けて

第105回薬剤師国家試験を振り返る

医学アカデミー薬学ゼミナール学長

木暮喜久子



6年生の皆さんが受験される2021年実施の第106回薬剤師国家試験(国試)は、改訂薬学教育モデルコア・カリキュラム(改訂コア・カリ)に準拠した「新薬剤師出題基準」での初めての国家試験です。旧コア・カリでの最後の国家試験であった第105回国試は、今年2月22、23日の両日に実施されました。表1に示すように受験者総数は第104回国試とほぼ同じ1万4311人、総合格者数は若干減少し9958人(第104回1万0194人)でした。総合格率は69.58%で、第104回(70.91%)と比較すると微減でした。6年制新卒の合格率は、84.78%(合格者数7795人)で第104回(85.50%)、第103回(84.87%)とほぼ同程度、6年制既卒の合格率は42.67%(合格者数2050人)で、合格者数は100人増加したものの、103回(47.00%)、第104回(43.07%)と合格率は低下し続けています。

第106回国試を受験される6年生の皆さんは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大により、学修環境が整わない状況で不安を感じている方も多いと思います。しかし、上記のように新卒での合格率は既卒より高いことから、新卒での合格を目指してなるべく早く勉強をスタートさせてください。青本などの参考書やオンライン教室など学修ツール等(参考：<https://www.yakuzemi.ac.jp/online>)の活用をお勧めします。

国試の合格基準は、第101回

から絶対基準から相対基準となり、第104回から禁忌肢(参考*)が加味されました。第105回の合格ラインは、全問題の得点が61.7%(345点換算で213点)で、近年の国試では最も低い合格ラインとなり(第103回217点、第104回225点)、難しい試験だったと言えます。また「禁忌肢選択数2問以下」でしたが、合格者数に大きな影響はなかったと思われます(表1参照)

参考：104回から適応されている合格基準(2018年厚生労働省通知)

以下のすべてを満たすことを合格基準とすること。なお、禁忌肢の選択状況を加味する。

①問題の難易を補正して得た総得点について、平均点と標準偏差を用いた相対基準により設定した得点以上であること。

②必須問題について、全問題への配点の70%以上で、かつ、構成する各科目の得点がそれぞれ配点の30%以上であること。

*「禁忌肢」は、第104回から加味されることになりました。公衆衛生に甚大な被害を及ぼすような内容、倫理的に誤った内容、患者に対して重大な障害を与える危険性のある内容、法律に抵触する内容等であり、誤った知識を持った受験者を識別されます。受験者は、禁忌肢導入の意義を理解し、6年間の薬学教育の中で医療人としての倫理観を養っていくことが重要です。

表1 第105回薬剤師国家試験の合格率

	合格率	出願者数	受験者数	合格者数
総数	69.58%	15,785名	14,311名	9,958名
6年制新卒	84.78%	10,276名	9,194名	7,795名
6年制既卒	42.67%	5,119名	4,804名	2,050名
旧4年制卒・受験資格認定者	36.10%	390名	313名	113名

※複数解答問題：1題(問299は、複数の選択肢を正解として採点)
 ※105回合格基準：
 ・全問題の得点が426点以上(注)配点は1問2点(690点満点)
 ・必須問題について、全問題への配点の70%以上で、かつ、構成する各科目の得点がそれぞれ配点の30%以上
 ・禁忌肢問題選択数は2問以下で合格

1. 第105回薬剤師国家試験を振り返って



薬学ゼミナールの第105回薬剤師国家試験自己採点システム(薬ゼミ自己採点システム)の結果(3月25日現在、1万2658人入力)では、第104回に比較し正答率が60%を超える問題数が少なく(20問程度減少)、「基礎力」に加え「考える力」現

場での実践力」等を必要と難易度の高い問題が多く、全体としては第104

2. 第105回薬剤師国家試験の総評と第106回に向かって

薬ゼミ自己採点システムによる第105回国試の平均点は、表2のように第104回に比べて合計で11.9点減少、理論問題は第104回とほぼ同様、必須問題と実践問題は第104回より大きく減少した難しい国家試験でした。第105回国試の領域別正答率(表3)では、例年難易度の高い理論問題の「物理・化学・生物」の正答率が低く、同様に「薬剤」も低い正答率でした。第105回ではさらに「病態・薬物治療」の正答率も低い結果でした。実践問題では、第104回同様「物理・化学」の正答率が低く、実践実務(全65問)の正答率が低かったことも特記すべきことでした。また、「物理」では、必須・理論・実践でも低い正答率でした。

1) 既出問題の出題は全体の20%くらいとされ、単なる正答の暗記による解答が行われないうように、問題の趣旨が変わらない範囲で設問および解答肢などを工夫することになっています。第104回では「病態・薬物治療」の必須・理論で、既出問題そのままの再出題がありましたが、第105回にそのままの再出題はありませんでした。

表2 103~105回薬剤師国家試験の出題形式別平均得点率(得点)比較

出題形式	105回	104回	103回
必須(90問)	80.0% (72.0点)	85.9% (77.3点)	81.5% (73.4点)
理論(105問)	60.5% (63.5点)	59.4% (62.4点)	59.2% (62.2点)
実践(150問)	65.3% (97.9点)	70.5% (105.8点)	67.8% (101.7点)
合計	67.6% (233.4点)	71.1% (245.3点)	68.7% (237.1点)

近年の既出問題を解くことは傾向をつかむために重要ですが、正答を丸暗記するだけでなく、参考書などで周辺の知識もしっかり学修しなければ得点できません。

2) 改訂コア・カリにより、長期実務実習中に必ず体験してほしいとされる「代表的な8疾患^{※1}」は、実践問題を中心にその疾患に関わる内容が多く出題されていますが、第105回ではそれらの疾患に対する一般的な知識では解答が導けない、臨床現場での対応能力が備わっているかを問う問題が多く出題されています。

※1「代表的な8疾患」：癌、高血圧症、糖尿病、心疾患、脳血管障害、精神神経疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症(薬学実務実習に関するガイドライン 2015年2月 文部科学省)

表3 第105回薬剤師国家試験の領域別正答率(%)

※赤字：正答率60%未満

領域系統	必須問題	理論問題	実践問題	総合
物理	56.5%	35.8%	59.0%	46.8%
化学	80.5%	47.1%	53.8%	57.1%
生物	73.8%	60.6%	67.5%	65.6%
衛生	82.8%	64.7%	63.7%	69.0%
薬理	77.2%	78.3%	69.2%	75.6%
薬剤	78.7%	57.4%	62.6%	66.7%
病態・薬物治療	82.9%	51.5%	63.9%	66.4%
法規・制度・倫理	83.8%	81.2%	74.4%	79.8%
実務	89.7%	-	65.3%	67.9%

3. 薬剤師国家試験の概略と第106回に向けての対策

薬剤師国家試験は、必須問題(90問)と一般問題(255問)の合計345題で出題されます。出題試験領域は「物理・化学・生物」「衛生」「薬理」「薬剤」「病態・薬物治療」「法規・制度・倫理」「実務」の7領域です。試験は、領域別に行うのではなく、薬学全領域を出題の対象として、「必須問題」と「一般問題」とに分け、さらに一般問題を「薬学理論問題」と「薬学実践問題」とした3区分で行われます(表4)。それぞれ試験区分の第105回の傾向と第106回に向けての対策を記載します。

1) 「必須問題」は、全領域で出題

され、医療の担い手である薬剤師として特に必要不可欠な基本的資質を確認する問題であり、共用試験と同様の五肢択一の問題です。また「必須問題」は、一般問題に比べて比較的正答率が高い問題が多く得点源です。「必須問題」は、80~90%の得点率を目指して勉強してください。第105回の「物理」の正答率は第104回と同様に低かった(表3参照)が、物理は「物理・化学・生物」として区分されるため、足りに該当する受験者はほばいないと予想されます。必須は近年難しくなり、第106回でも医療に絡む問題が出題され